

多忙化する学校現場で学ぶこと

伊藤 陽一（本学教職研究科准教授）

公立教員採用試験の倍率低下が叫ばれるようになって久しい。特に小学校教員の2022年度採用試験の倍率は、全国2.5倍と4年連続で過去最低を記録し、地域差が大きい。そうしたニュースを見聞きする度に、我々教育関係者は、「教員は人気のない職業になってしまったのか。」「教員の質は、どうなってしまうのか。」と残念な気持ちになったり不安になったりする。

一般的に「採用倍率」は、受験者数÷採用者数の数であり、受験者数が変わらず採用者数が増加すると倍率は低下し、同様に採用者数が変わらず受験者数が減少すると倍率は低下する（受験者数と採用者数は、各自治体の状況や実態等によって異なる）。

まず採用者数は、定年退職者の数や内定辞退者数、少人数学級設置等の政策的ニーズに左右され、年度によっての多少の増減はあるもののここ5年間小・中・高・特別支援学校ともに安定している。受験者数は、新卒者（教員免許取得者）と既卒者（多くは講師）の合計数であり、新卒者・既卒者共に減少傾向にある。既卒者の減少は、正規採用の増加と教員採用試験不合格者が他職に流出したことが理由であり、それが深刻化した常勤・非常勤講師不足の一因である。

新卒者の減少は、民間企業の採用や景気によって左右され、教員養成系大学・学部であっても教員就職率が低下し、小学校で4割、中学校で6割、高校で8割の教員免許取得した学生が採用試験を受けていない。そして何よりも、教員免許を取得し教員志望する学生が年々減少していることに心が痛む。

各自治体は、人材確保のために採用試験時期の早期化や年齢制限の緩和、免許制度の弾力化といった対策を提案しているが、少子化対策や実効的な働き方改革、教員定数・処遇改善といった抜本的な対策が重要だと思う。では、どうして教員という職業が敬遠され、不人気になってしまったのか。

その要因として最も指摘されているのが、教員の多忙化、学校現場がブラック化した職場環境であるとい

うマイナスイメージである。そして、そうした状況下で「教職専門研修」が行われている。院生にとって「教職専門研修」は、「理論と実践の往還」することで「実践知」を獲得するという大きな意義がある一方、受け入れ側の学校では多忙化の一因となり得るということを我々は絶えず認識していかなければならない。

「忙しくされている先生にどのように話しかけたらいいのか難しい。」という声を院生からよく聞く。それに対しては、どのタイミングがよいのか見極め判断することと明確にいつ打ち合わせが可能なのかを直接先生に尋ねることが必要だと助言している。一番よくないことは、相手に遠慮して何も声掛けせず話す機会を逸してしまうこと。「教職専門研修」は、教育実習とは違い学校現場で様々な校務の実際を学ぶことにあり、先生方が忙しくされている要因がどこにあるのかを探ることも大切な学びである。教材研究なのか学級経営なのか。校務分掌なのか学校行事なのか。保護者対応なのか生徒指導なのか。先生固有の問題なのか学校組織の問題なのか。その要因を分析し、自分ならどう対応するか考えることに大きな意味がある。

また、教員として学校教育の全体像を俯瞰的に見る視点の獲得も重要な学びである。ある院生が、「この学校の取組は、非常に進んでいますね。授業も、教育実習での学校よりもいいです。」とコメントした。本人は、学校を率直に褒めたつもりであったが、教頭先生から「あなたは（院生）は、本校の先生として位置づけているので、自分事として実習してほしい。」と指摘を受けた。院生は、学校教育を俯瞰的に見ることと自分事として取り組むことの難しさを実感した。

さて、いよいよ4月から教職専門研修2が始まる。院生同様実務家教員である私も、多忙な新学期を迎える学校現場で「理論と往還」の難しさ（課題）を捉え、その解決策・改善策について考察し、実践することによって、少しでも教員養成と学校教育に貢献・寄与できるよう前向きに取り組んでいきたい。